

「ポツダム会談へ向けて」 関係年表

年	日	出来事	年	日	出来事
1931	9. 18	柳条湖で満鉄爆破。満州事変始まる	1945	5. 14	6首脳、「和平にソ連仲介」の方針決定
1937	7. 7	盧溝橋事件勃発。支那事変始まる	5. 28	グルー、対日戦早期終結のため「天皇制存続」の声明をトルーマンに進言	
1939	9. 1	第2次世界大戦始まる	6. 1	東郷、佐藤尚武駐ソ大使に「日ソ友好強化」交渉開始を訓令◆内大臣木戸幸一に東大教授南原繁、高木八尺「対米交渉」を提言◆米スティムソン委員会は大統領に、日本に原爆投下を勧告	
1940	9. 27	日独伊三国同盟、ベルリンで調印	6. 3	広田弘毅元首相、ソ連大使マリクを強羅ホテルに訪ね、対ソ交渉を始める	
1941	4. 13	日ソ中立条約、モスクワで調印	6. 8	御前会議、「戦争指導の基本大綱」(飽く迄戦争完遂)を決定◆木戸、「ソ連に仲介依頼」の時局收拾試案を起草◆佐藤、「日ソ友好強化は絶望的」と電報	
	6. 22	ドイツ軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる	6. 9	天皇、木戸試案に「速やかに着手を」◆鈴木首相、施政方針演説	
	10. 18	東条英機内閣発足。東条は陸相兼任	6. 15	藤村中佐「大臣、大将クラスをスイスへ送れ」のダレス提案を打電	
1942	12. 8	太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃	6. 18	木戸試案を阿南陸相に提示◆6首脳会議、ソ連仲介の和平工作合意◆グルー再び大統領に「対日声明」要請◆米、軍首脳会議で日本本土上陸作戦決定	
	6. 5	ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失	6. 20	木戸、天皇に6首脳会議召集を要請	
	8. 7	米軍、ガダルカナルに上陸開始	6. 22	最高会議構成員の御前会議。天皇、終戦につき「速やかに研究し実現を」	
1943	1. 14	米英首脳がカサブランカ会議	6. 23	牛島満第32軍司令官ら沖縄南部摩文仁で自決。沖縄の組織的抵抗終わる	
	9. 8	イタリア無条件降伏	6. 24	広田・マリク会談再開	
	11. 1	軍需省新設。東条が軍需相兼務	6. 26	サンフランシスコ会議で国連憲章成立◆ステイニヤス、米国首席代表に	
	11. 22	米英中首脳がカイロ会談	6. 28	東郷、広田に対ソ交渉具体案を手交	
	11. 28	米英ソ首脳、テヘラン会談	6. 29	広田、マリクに日ソ関係改善案提示◆トルーマン、九州作戦(11月1日)承認	
1944	1. 15	米國務省に極東問題局を新設	7. 2	スティムソン陸軍長官、大統領に「日本に天皇制を認め降伏勧告」の覚書	
	2. 21	東条、陸相兼任のまま参謀総長兼務。嶋田繁太郎(勲)も軍令部総長兼任	7. 3	新國務長官にバーズ	
	4. 18	支那派遣軍、大陸打通「1号作戦」開始	7. 7	天皇、鈴木に対ソ交渉促進を指示◆トルーマン、巡洋艦でポツダムへ出発	
	5. 1	極東問題局長ホーンバックを更迭、グルー元駐日大使が新局長に	7. 8	東郷、近衛文麿元首相に遣ソ特使依頼	
	6. 15	米軍、サイパン島に上陸(7月7日陥落)	7. 10	6首脳会議、「遣ソ特使派遣の件」決定	
	7. 18	東条内閣総辞職	7. 11	佐藤、モロトフ外相に回答を督促	
	7. 22	小磯国昭・米内光政連立内閣成立。米内は現役に復帰し海相	7. 12	天皇、近衛にソ連派遣使節を下命	
	8. 5	大本営政府連絡会議を廃止して最高戦争指導会議設置	7. 13	佐藤、近衛派遣をソ連に申し入れ	
	10. 20	米軍、レイテ島に上陸	7. 14	6首脳会議で近衛特使正式決定◆スターリンとモロトフ、ポツダムへ出発	
	10. 25	神風特別攻撃隊、レイテ沖に出撃	7. 16	米、世界最初の原爆実験成功	
	11. 1	サイパン発進のB29、東京を初偵察	7. 17	米英ソ三国首脳、ポツダム会談開く	
	11. 7	米大統領選挙。ルーズベルト4選	7. 18	ソ連、近衛派遣拒否を回答◆スターリン、ポツダム会談で日本からの和平斡旋依頼を明かす	
	11. 10	支那派遣軍、桂林、柳州(絞殺場)占領	7. 26	無条件降伏要求のポツダム宣言発表	
	11. 24	B29、中島飛行機など東京を初空襲	7. 28	鈴木首相、内閣記者団に「ポツダム宣言黙殺と戦争邁進」を言明	
	11. 27	ハル國務長官辞任。新長官にステイニヤス。グルーは國務次官に昇格	8. 2	ポツダム会談終わる	
1945	1. 9	米軍、ルソン島リンガエン湾に上陸	8. 6	広島に原爆投下(9時15分長崎)	
	2. 4	米英ソ三国首脳、ヤルタで会談	8. 8	ソ連、日本に宣戦布告	
	2. 10	スターリン、ルーズベルトに「ドイツ降伏後3か月に対日参戦」を約束	8. 9	ソ連軍、満州、朝鮮、樺太で侵攻開始	
	2. 19	米軍、硫黄島上陸	8. 15	敗戦。鈴木内閣総辞職。グルー辞職	
	3. 10	334機のB29、東京大空襲。江東全滅			
	3. 17	硫黄島の日本軍守備隊全滅			
	4. 1	米軍、沖縄本島嘉手納海岸に上陸			
	4. 5	小磯内閣総辞職、鈴木貫太郎に大命◆ソ連、日ソ中立条約不延長を通告			
	4. 7	鈴木内閣成立。陸相に阿南惟幾、海相に米内◆戦艦大和、沖縄特攻で沈没			
	4. 9	外相・大東亜相に東郷茂徳元外相			
	4. 12	米大統領ルーズベルト死去。第33代大統領に副大統領トルーマン			
	4. 15	憲兵隊、元駐英大使吉田茂を逮捕			
	4. 22	参謀本部、東郷に対ソ工作申し入れ			
	5. 2	藤村義朗海軍中佐、スイスで「ダレス機関」と接触、終戦工作を始める			
	5. 7	ドイツ、連合軍に無条件降伏			
	5. 8	ザカリアス海軍大佐、対日放送開始			
	5. 11	最高会議、構成員6人だけの首脳会議◆チャーチル、米に「三大国会議」提唱			

●ポツダム会談は、昭和20年7月17日から始まった

ポツダム (Potsdam)

ドイツ東部、ベルリンの南西にある工業都市で、フィルム製造が盛ん。またサンスーシ宮殿など、多くの離宮・別荘が世界遺産に指定。

▽米英ソ3国の首脳 トルーマン チャーチル

スターリンが集まり 26日には

対日最後通告として「ポツダム宣言」発表  
広島 長崎への原爆投下→ ソ連の対日参戦  
→ ポツダム宣言受諾→ 8月15日に終戦

▽「日本への降伏勧告問題討議がポツダム会談だ」

実際は 公式の議題は 全て「ヨーロッパ問題」  
3巨頭の話し合いも ヨーロッパの戦後処理に

▽3国首脳が それぞれ 異なった思惑で集まり

始まったのが ポツダム会談だった

●連合国は、なぜポツダム会談を必要としたのか

▽ドイツ降伏(5月7日)の 前後から

ソ連が ポーランドをはじめ 東欧を支配下に  
早くも 米英との対立が 表面化して来た

…… 首脳会談にはギリシャ語の暗号名 ……………

テヘラン会談は「ユーリカ」。「私は発見した」の意味。アルキメデスが入浴中、王冠の金の純度を測る方法を思いついたとき風呂から裸で飛び出し、「ユーリカ、ユーリカ」と叫びながら町中を走り回ったという。

ヤルタ会談は「アーゴノート」。ギリシャ神話で、人類最初の大きな船「アルゴ号」を建造し、航海に乗り出した英雄たちを意味する。

▽ポツダム会談は 英語で「ターミナル」(結 納り)

会談を提唱し 名付け親のチャーチルには  
「終わり」ではなく「新しい対立の始まり」

▽チャーチルは 5月11日 トルーマンに

「スターリンを会談に招くべきだ」と 電報  
追いかけて 翌日12日には

「鉄のカーテン」の言葉を使って 警告した

トルーマン (Harry S. Truman)

1884~1972 米ミズーリ州・ジャクソン郡判事。昭和9年の中間選挙で民主党上院議員。副大統領になり20年4月ルーズベルト急死で第33代大統領。23年再選

チャーチル (Winston Churchill)

1874~1965 英保守党政治家。蔵相などを歴任し、昭和15年首相となり第2次大戦で指導力を発揮、連合軍勝利に貢献。ポツダム会談直前の総選挙で労働党に敗れ会談後(7月27日)に退陣したが、26年再び首相。著に回顧録「第二次世界大戦」。28年にノーベル文学賞受賞

スターリン (Iosif V. Stalin)

1879~1953 グルジア生まれ。大正11年共産党書記長として実権を握り大量粛正で個人独裁を樹立。昭和11年首相(根拠無)に就任、対独抗戦を指導した。死後、その専制支配が批判された

蒋介石 (しょう・かいてき)

1887~1975 日本に留学し、士官学校に学ぶ。昭和3年国民革命軍総司令となり北伐に成功、南京政府、国民党の実権を握る。中共軍と抗日戦を指導したが、次第に反共路線を強め、24年国共内戦に。敗れて台湾に逃れ、中華民国総統

— 連合国首脳は戦争中、再三会談 —

日本に関係あるものだけでも

▽カサブランカ会議(18. 1. 14) 米英首脳が日独伊3国対する「無条件降伏要求」の原則を決定した。

▽カイロ会談(18. 11. 22) 蒋介石が加わり戦後の日本領土を規定、「日本が無条件降伏するまで戦う」と宣言。

▽テヘラン会談(18. 11. 28) 蔣に代

チャーチル回顧録「第二次世界大戦」から  
しかしながら、事態にはもう一つの局面があった。日本はまだ征服されていなかった。原子爆弾がまだ生まれていなかった。世界は混沌としていた。大同盟を結んでいた共通の敵という主要な絆が、一夜のうちに消えていった。私の目には、ソ連の脅威がすでにナチスという敵にとって代っているように見えた。しかしそれに対する連携は存在していなかった。…民主主義国の戦勝軍が間もなく解散し、本当の最もきびしい試練がわれわれの前に横たわっているという不安を、私はぬぐい去ることができなかった。

…私が第一に考えたことは、三大国会議を行なうことだった。私はただ、救援のない国に押し進められている、ソビエト・ロシア帝国主義の広範な現われを感ずるのみだった。最初の目的がスターリンとの会談でなければならぬのは明らかだった。ドイツ降伏から三日と経たないうちに私は、大統領に対し、われわれがスターリンを会談に招くべきだという電報を打った。

▽戦後世界を見通して「さすがチャーチル」  
アメリカの軍事力がソ連に  
無言の圧力を加えているうちに  
ソ連の傍若無人な行動を牽制しようとした  
▽チャーチルは「6月15日開催」を要望し  
スターリンは「7月1日」を提案してきた

●トルーマンが考えたのは、日本の早期降伏にソ連を使うことだった

▽トルーマンが「7月15日」を選んだのは  
この前後に原爆実験もし成功すれば  
トルーマンの地位を飛躍的に高めることに  
▽会談はスターリンの出発が急病で遅れ  
17日スタートとなったが…  
アメリカは前日16日  
ニューメキシコ州アラモゴードの砂漠で  
世界最初の核爆発実験に成功していた

わりスターリンが参加、ドイツ降伏後の対日参戦を秘かに表明した。

▽ヤルタ会談(20. 2. 4)米英ソ3首脳が集まり、ソ連は秘密協定で「ドイツ降伏後3か月以内に対日参戦」約束。

▽枢軸側＝首脳会談は1回も開かれていない。戦争が始まってからは、日独伊3国間は完全に遮断され、潜水艦で陸海軍関係者を往来させる程度。

— トルーマン宛て電報(5月12日) —

新聞には、アメリカ軍のヨーロッパからの大移動についての記事が満載されています。わが軍もまた、以前の取り決めのもとに、大幅の縮減を行なうことになるようです。…一方、ロシアはどうなるでしょう？…ヤルタ協定に関する彼らの誤った解釈、ポーランドに対する態度、ギリシアを除くバルカン地域における圧倒的勢力、ウィーンについて彼らが引き起こしている困難な問題、とりわけ長期間にわたって、戦場に巨大な軍隊を保持する彼らの力などのために、私は深刻な不安を感じております。一、二年後、米英軍が解散しロシアが依然として二、三百個師団を積極的な任務につかせようとするとき、情勢はどうなるのでしょうか？鉄のカーテンが彼らの戦線におろされたのです。その背後で何が起きているか、われわれにはわかりません。…要約するなら、われわれの兵力が失われないうちにロシアとの解決に達するというのが、私にとっては、他のすべての問題よりもはるかに大きいと思われるのです。

……「トルーマン回顧録」から ……………  
大きな損害を出しながら、わが軍が太平洋を進撃するとき、ソ連の参戦 ……………

▽ソ連の手助けは 必要なくなったし  
それどころか 邪魔なものにさえ なる

●国家の存亡がかかっている時、日本の政治的決断は  
余りにも遅過ぎた

▽最高戦争指導会議は 5月14日

構成員(首相 外相 陸相 海相 参謀長 軍令部長)だけの

6首脳会議で 対ソ交渉を 決めていた

①ソ連の参戦防止 ②ソ連の好意的態度の誘致  
③ソ連に戦争終結の仲介を依頼する

▽「対日参戦」を 決めてソ連に

和平仲介の依頼は まさに「幻想」だったが

「終戦」の方向で 初めて 最高首脳の合意が

▽広田弘毅(元相)が 箱根に マリク(リヂヤ)を訪ね

日ソ交渉を申し入れたのが 6月3日

マリクは 本国政府への報告も

電報ではなく クーリエ(伝書)を使う有様

▽ソ連は 日ソ中立条約の 不延長通告(4月5日)後

極東に 続々と 大軍を送ってきていた

▽見込みのない交渉に 貴重な時間が 失われた

▽6首脳合意は「他言無用、絶対秘密」を 申し合わせ

木戸幸一(内相)も 天皇も 知らなかった

— 6月8日の御前会議は「飽ク迄戦争完遂」 —

「今後執ルベキ戦争指導ノ基本大綱」として、  
「地ノ利人ノ和ヲ以テ飽ク迄戦争ヲ完遂シ 以  
テ国体ヲ護持シ皇土ヲ保衛シ征戦目的ノ達成  
ヲ期ス」と決定した。天皇は「みな、誰か言い出  
すのを待っているようだ」と洩らされた。こん  
な状況で本土決戦をする無理は誰にも分かっ  
ているのに、問題は誰がそれを言い出すのか。

●木戸は、終戦へ向けて「時局收拾試案」を起草した

▽天皇の親書携行の使節を ソ連に送り

和平仲介を依頼 天皇も「速やかに着手を」

▽鈴木貫太郎(首相) 東郷茂徳(外相) 米内光政(海相)の

賛成は 簡単に得られたが 最大の難関は陸軍

…… 木戸は阿南惟幾(海相)を説得した ……………

「木戸日記」には「阿南君にはよく話して了解  
してもらわなければならないが、これを考え

を早めれば、幾十幾百万の米国人の  
生命を救うことになる、と考えた。私  
が米国を出て、スターリンやチャー  
チルと会うことにした主な理由の一  
つはこれであった。…中国に大兵を  
入れて、日本軍を中国本土から追っ  
払うよりも、私の希望は、常に十分な  
ソ連兵力を満州に入れ、日本軍を追  
い出すことであった。それがこの際  
できる唯一の道である。

広田 弘毅(ひろた・こうき)

明治11(1878)～昭和23(1948)福岡県生  
まれ。昭和5年駐ソ大使。斎藤、岡田内閣  
外相を経て、11年二・二六事件直後に首  
相。軍部大臣現役武官制を復活、日独防  
共協定に調印。12年近衛内閣外相。戦後  
の東京裁判では南京虐殺事件の外交責  
任を問われ、文官中ただ一人絞首刑に

木戸 幸一(きと・こういち)

明治22(1889)～昭和52(1977)東京生ま  
れ。維新の元勳木戸孝允の妹の孫。昭和  
5年内大臣秘書官長。文相、厚相歴任。15  
年内大臣に就任。開戦前、後継首相に東  
条を推挙したが、戦争末期、反東条とな  
り倒閣、終戦に尽力。A級戦犯で終身禁  
固刑。30年出所。著に「木戸幸一日記」

鈴木 貫太郎(すずき・かんたろう)

慶応3(1867)～昭和23(1948) 父親が代  
官をしていた関宿藩の飛び地、大阪・久  
世村で生まれる。海軍大将。大正13年連  
合艦隊長官、14年軍令部長。昭和4年1月  
予備役となり侍従長。二・二六事件で襲  
撃され、瀕死の重傷を負って辞職した。  
天皇の信任は厚く、15年枢密院副議長。  
19年枢密院議長。20年4月首相に就任し  
「聖断」で終戦に導く。20年12月、枢密院  
議長に再任。著に「鈴木貫太郎自伝」

ると頭が痛い。それで彼と会うのを一寸のばしにしていたんだ。ところがうまいことに、十八日彼の方から別の用事で私のところへ来たんだ」木戸は収拾案を説明、単刀直入に「戦争の前途は見込みがないんじゃないか」と、切り出した。阿南は「軍部としては本土決戦は是非やってみたい。本土決戦でうんと叩いて、それからならば和平も有利に出来はしないか」

そこで「本土決戦は駄目だ。陛下のご心配も、実は本土決戦まで続けたら駄目だという点にある。本土決戦まで行ったら、結局焦土作戦で亡国になるぞ」それでもなかなか承知しないので、「君、もし敵に上陸されて、三種の神器を分捕られたり、伊勢神宮が荒らされたり、歴代朝廷の御物がボストン博物館に陳列されてしまったりしたら、どうするつもりか」

木戸は「日本の軍人は、皇室のこと、特にそれが辱めを受けることには敏感だった」しばらく考えていた阿南は、「あなたの考え方には大体賛成だ。よく考えてみよう」と言って帰っていったが、木戸は「阿南はそれからだんだん終戦に纏めようと云う気持ちになったようだ」

#### ▽6月18日夜 6首脳会議で

阿南 梅津美治郎(録音) 豊田副武(録音)は「華々しい戦果を挙げた上で和平交渉」と主張  
それでも「戦争終結への努力には異存ない」との答えで 次の合意が出来た

#### 6首脳の合意(20. 6. 18)

敵が無条件降伏に固執する限り、もちろん戦争継続のほかないが、我が方が相当の余力を有する間に第三国、特にソ連を通じて和平を提唱し、少なくとも国体護持を完うする平和に導くことが望ましい。なお九月までに戦争を終結する目的をもって、七月上旬中にソ連側の態度を内偵し、なるべく速やかに終戦の措置を講ずることとする。

#### ▽木戸にとって 次の障害は

8日の「飽ク迄戦争完遂」の 御前会議決定

#### 東郷 茂徳(とうごう・しげのり)

明治15(1882)～昭和25(1950)鹿児島県生まれ。駐独・駐ソ大使を経て昭和16年開戦時の東条内閣外相。20年4月再び鈴木内閣外相となり、終戦に尽力。東京裁判で禁固20年の刑を受け、拘禁中病死。著に「時代の一面 大戦外交の手記」

#### 米内 光政(よない・みつまさ)

明治13(1880)～昭和23(1948)岩手県生まれ。海軍大将。昭和11年連合艦隊長官となり、12年林内閣海相。第1次近衛、平沼内閣に留任。15年首相に就任したが、日独伊三国同盟に反対したため陸相辞職で内閣総辞職。19年7月現役に復帰し小磯、鈴木内閣海相となり終戦に尽力

#### 阿南 惟幾(あなみ・これか)

明治20(1887)～昭和20(1945)東京生まれ。陸軍大将。中佐の時に昭和4年から4年間、鈴木が侍従長時代に侍従武官。陸軍次官、第2方面軍司令官、航空総監。20年4月鈴木内閣陸相となり、ポツダム宣言に条件付受諾を主張。敗戦の夜自決

#### 梅津 美治郎(うめづ・よしじろう)

明治15(1882)～昭和24(1949)大分県生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和17年関東軍司令官。19年参謀総長。A級戦犯で終身禁固刑を受け、拘禁中に病死

#### 豊田 副武(とよだ・そむ)

明治18(1885)～昭和32(1957)大分県生まれ。海軍大将。軍務局長、第4、第2艦隊長官を経て昭和19年5月連合艦隊長官。20年5月軍令部総長。戦犯で収容されたが23年釈放。著に「最後の帝国海軍」

#### 木戸は、天皇について

とにかく陛下という方は「この方針がいい」とおっしゃったら、後は非常

▽天皇に「最高会議の構成員を御召になり、  
直接に和平促進の思召を表明して頂きたい」

●天皇は6月22日午後、構成員6人を御召になった

▽何から何まで 異例づくめの会議だった

天皇をU字型に囲み 懇談会形式

正式の御前会議にして 天皇が「こうしろ」と  
おっしゃると 憲法の責任内閣制の問題に抵触  
しきたりを破り 最初に発言したのも天皇

「木戸日記」は、天皇の言葉をこう記録

先ず陛下より「戦争の指導に就ては曩(さき)に  
御前会議に於て決定を見たところ、他面戦  
争の終結に就きても此際従来の観念に囚わる  
ゝことなく、速に具体的研究を遂げ、之が実現  
に努力せむことを望む」との意味の御言葉あり。  
右につき首相の意見如何とのお尋ねあり、  
首相は仰せの通りにて其実現を図らざるべから  
ずと奉答す。

▽誰もが公然と 口にすることを

ためらっていた「終戦」を 天皇が初めて言葉に  
「従来 of 観念」とは「絶対に降伏しない」こと  
「降伏の形をとっていいから、和平の推進を」

▽「軍部の所見如何」に 梅津(鏑龍)が

「和平の提唱は、内外に及ぼす影響が大であるか  
ら、十分、事態を見定めた上に、慎重措置する必  
要があると思います」

▽天皇は 厳しく 念を押された

「慎重に措置するというのは、敵に対しさらに  
一撃を加えた後でというのでは、あるまいね」  
梅津も「速やかなるを要すと考えます」

「陸軍大臣は如何」に 阿南(蘭)は  
「特に申し上げることはありません」

▽揺れ続けていた「終戦和平」への道は

最高首脳 of 合意(5月14日)以来 39日  
天皇の一言で はっきり 方向づけされた

●日本の終戦工作は、ソ連一本槍に

▽加瀬俊一(勲前外務省)は 木戸に 意見を求められ  
「帝国 of 和平提唱は速やかなるを可とする」

にはっきりして、強いんだ。それがな  
ければ、私なんか、こんな工作は出来  
やしない。後ろが怪しかったら、いつ  
ハシゴを外されるか、なんていうん  
じゃやれない。そりゃあ、問題によっ  
ては、陛下に対しても露骨なくらい  
に念は押す。それでよろしい、とおっ  
しゃったら、もう動かん。そりゃあ立  
派なものですよ。だからこの時も、私  
は相当思い切ってグングン進めたん  
だ。

— 鈴木、岡田啓介は言っている —

御前を下がってきた鈴木(首)は、迫  
水久常(勲前)に「今日は陛下から、  
我々が内心考えても、口に出すこと  
を憚られることを率直に仰せられて  
まことにありがたいことである」

岡田啓介(元首)も回顧録に、「これを  
聞いて、ああありがたい。わたしが  
いわんとして、どうしてもいうこと  
をはばかれるようなことを陛下は  
おっしゃってくださった。これで、鈴  
木もやりやすくなるだろう、と思っ  
た次第だった」

迫水 久常(さかみず、ひさつね)

明治35(1902)～昭和52(1977)鹿児島県  
生まれ。岡田啓介の女婿。大蔵省に入り  
岡田首相秘書官、企画院課長を歴任。大  
蔵省銀行保険局長の昭和20年4月、鈴木  
内閣書記官長に就任、終戦に尽力した。  
公職追放解除後、27年自由党衆院議員。  
池田内閣で経企庁長官、郵政相。31年参  
院議員。著に「機関銃下の首相官邸」

岡田 啓介(おがた、けいけい)

慶応4(1868)～昭和27(1952) 福井県生  
まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭  
和2年田中内閣海相。8年斎藤内閣海相。  
9年首相に就任したが二・二六事件で襲

▽しかし 対ソ交渉にしても スローテンポ  
土壇場の戦局に 間に合うものではなかった  
▽広田・マリクの 第3回会談は 6月24日  
広田が 好意的協定の締結を 申し入れても  
「具体的提案でなくては了解できにくい」  
▽東郷も 近くポツダム会談開催を 知って  
会談前に 講和に入る足場を 作りたいたいと思  
28日 広田に 対ソ交渉の具体案を 提示した  
▽広田は 翌日(29日) マリクに 正式に提案  
「日ソ間の永続的親善関係を調整し、東亜の恒久  
的平和維持に協力する目的をもって、両国間に  
東亜における不侵略協定を締結する」  
▽具体的には 満州国の中立化

石油の供給を条件とする 漁業権解消  
「ソ連側が希望する問題については、胸襟を開  
いて話し合う」と 本国政府への取次を依頼

— ソ連利用構想には最初から無理が —

日本側が対ソ交渉のために用意した代償は、  
南樺太返還、漁業権解消、津軽海峡開放に北満  
州における鉄道の譲渡などで、場合によって  
は千島列島北半分の譲渡だった。

ところがルーズベルトは、ヤルタ会談の際に  
樺太、千島のソ連引き渡しから旅順の供与、大  
連自由港化、満鉄の租借など、蒋介石政権に属  
する利権まで約束していたのだ。

▽マリクは 広田の会見申し入れにも  
「病気」を理由に 応じない 東郷も  
「日本側提案を伝書使便で送った」と聞いて  
モスクワと 直接交渉することにした  
「高松宮日記」(7月2日)

一八〇〇東郷外務[大]臣(ハッキリト何時マ  
デニ、ドウシテ、何時、御親書ヲモツテ、誰レ  
ガ「ソ」ニ赴ク等ノ計画マデ考ヘテキナイ。時  
間ガ線表ニナツテオラヌ様ダツタ)

▽天皇も 7月7日 鈴木(訃)を呼ばれて  
「ソ連の肚を探るといっても、時期に限りがある  
のだから、早速親書を携えた特使を派遣するこ  
とにしてはどうか」と 催促された

撃され、危うく助かる。戦争中は東条内  
閣倒閣、和平工作推進に、重臣の中心と  
なって動く。著に「岡田啓介回顧録」

加瀬 俊一(かせ・としかず)

明治37(1904)～平成16(2004)千葉県生  
まれ。昭和15年松岡外相秘書官となり、  
日米開戦時は北米課長。情報部長を歴  
て18年重光外相秘書官。戦後はユーゴ、  
国連大使、外務省顧問。慶応大学などで  
外交について講義。著に「戦争と外交」

— 加瀬の「終戦促進に関する献策」 —

「帝国の和平提唱は速かなるを可と  
すること論なき処にして、一日の遷  
延は一日の損失を加重す。現下の情  
勢より顧みれば、屈伏条件の緩和は  
恐らく至難ならん。従って政府とし  
ては当初より無条件降伏を覚悟して  
事に当らざるべからず。皇室のご安  
泰と国体の護持を達成せば、先ずは  
成功という位に考え置くを安全とす  
べし。要は廟堂において時局転換に  
速に決意するにあり」

…… 戦局の実情も隠されていた ………

東郷(外)は広田・マリク会談が中断  
したままなので、何度か督促したが、  
広田の方は「余り急ぐと、こっちの肚  
を見られるので損じゃないか」東郷  
は「外交の筋道からいえばそうだが、  
その頃は戦局が非常に悪くなってい  
ることが、ほとんど重臣とか、そうい  
う方面の人にもわかっていない。僕  
らだって、海軍で軍艦がみんな沈め  
られたことなんか、一つも報告を受  
けていない」と言っている。

高松宮 宣仁親王(たかまつのみや・のぶひと)

明治38(1905)～昭和62(1987)大正天皇  
の第3皇子。海軍大佐。軍令部参謀の昭



▽東郷(外相)は 鈴木と相談して

近衛文麿(元首相)を ソ連派遣特使にすることにし

この7日 軽井沢に 近衛を訪ねていた

近衛が「天皇のご命令があれば」と承諾

構成員会議で 近衛派遣を 決定したのが10日

近衛は 12日上京 天皇が直接 特使を話された

▽近衛が「身命を賭してお受けします」

14日の構成員会議で「近衛特使」が 正式決定

▽米内(海相)は 秘かに 終戦工作に当たらせていた

高木惣吉(海軍少将)に「東郷はスローモーで

用心にも程度がある」と 忿懣をぶちまけている

●意志決定の遅さは、日本の戦争指導機構の仕組みに

▽良くも悪くも 日本には

ヒットラー チャーチル ルーズベルトの

ような 絶対的な指導者が いなかった

— 東条英機(首相)も、そうではなかった —

首相就任の際陸相を兼務し(一時的に内相)、その後も軍需相、参謀総長を兼務、憲兵政治までやって、一見独裁者のように見えた。サイパン陥落(昭和19年7月7日)で、重臣の間に倒閣の動きが出てきたとき、東条は重臣を内閣に取り込むことで乗り切ろうとした。国務相のポストを空けるため国務相(軍需相)岸信介に辞職を要請したが拒否され、総辞職に追い込まれた。

明治憲法では首相に閣僚の任免権はなく、東条でさえ一国務大臣のポストを自由に出来なかった。

▽東郷(外相)が 5月に 最高戦争指導会議を

構成員だけの 6首脳会議にしたのも

関係者を 最小限に絞り「終戦」という

口出来ない問題を 忌憚なく 話し合うため

▽しかし 結局は 最高戦争指導者が

1人ではなく 6人だったため

その6人の 一致がなくては

重要案件は 何一つ 決定も処理も出来なかった

▽原因の第一は「無条件降伏」へのアレルギー

第二に「本土決戦」を 強く主張する陸軍を

どうやって「終戦」に 同意させるか

和19年8月、何でもずばずば発言するのが、東条内閣時代の海相・軍令部総長嶋田繁太郎に嫌われ、砲術学校教頭(海軍)に飛ばされたが、20年6月26日付で軍令部参謀に。戦後は国際文化振興会総裁。海兵在学中の大正10年から書き続けられた「高松宮日記」(20冊)

近衛 文麿(このえ・ふみまろ)

明治24(1891)～昭和20(1945)東京生まれ。貴族院副議長を歴て昭和12年第1次内閣を組織。支那事変で「国民政府対手ニセス」と声明し早期解決の道を塞ぐ。15年第2次内閣で日独伊三国同盟締結、枢軸外交、南進政策を推進。16年松岡外相を更迭、日米交渉打開に努めたが、10月総辞職。戦後、戦犯に指名され自殺

高木 惣吉(たかぎ・そうきち)

明治26(1893)～昭和54(1979)熊本県生まれ。海軍少将。海軍省調査課長を経て昭和19年3月教育局长。米内海相の特命で9月から軍令部出仕となり、終戦工作に当たる。著に「私観太平洋戦争」

ヒットラー(Adolf Hitler)

1889～1945 オーストリア生まれ。第1次大戦にドイツ軍伍長で従軍。戦後、ドイツ労働者党に入党して党名をナチス党と改め、大正10年党首。世界大恐慌の中で支持層を広げ、昭和7年ナチ党を第一党とし翌年首相。共産党など弾圧し、独裁権を掌握。14年第2次大戦を起こして、降伏直前に自殺。著に「わが闘争」

東条 英機(とうじょう・ひでき)

明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸軍次官を経て昭和15年陸相。16年10月首相に就任し陸相、内相兼務。18年11月新設の軍需相も兼務、19年2月には参謀総長兼任を強行したが、



▽対ソ交渉の始まりも 4月22日

河辺虎四郎(かべとらしろう)が 東郷に

「ソ連参戦は何としても防いでほしい。対ソ工  
作を大胆にやってほしい」の 申し入れから

▽東郷に乗ったのは 陸軍側の気持ちを 利用して

ソ連に 話を持ち掛け ます「終戦」への足場を

▽木戸(かど)が「ソ連仲介」を 選んだのも

「米英と直接交渉の道があれば、これを第一に採  
るの当然だが、当時の情勢は軍部はまだ平和  
交渉に気乗りしていなかった。まして当の敵国  
との交渉には絶対反対の態度をとったろう。一  
面、陸軍の一部にソ連を介する動きがあるのを  
知り、この道を採用すれば軍を誘導して平和を策す  
ることも、不可のではないと考えたのだ」

#### 昭和天皇も松平康昌に

松平(まつだいら)康昌(やすまさ)は「後日、陛下は和平は正面か  
ら米英に申し込むのが一番良いと思ったが、  
当時の国内事情、殊に軍部には米英は敵国だ、  
敵国に斯かる申し込みをすることは怪しから  
ん、ロシアは中立国だから、ロシアを通ずるの  
はよろしいと云う空気が強かったから、已む  
を得ず次善の策としてロシアを通じようと思  
った、と云われた」(昭和24年5月 GHQ歴史課の事情聴取)

#### ●陸軍は、「本土決戦」にどの程度の成算を

▽陸軍省軍事課長・荒尾興功大佐(あらおきさか)は

「南九州では五分五分、作戦部では必勝と信じて  
いたろう。相模九十九里浜の兵備では統帥部で  
は自信を持っていたが、私は五分五分。士気が  
戻り昂揚していれば、六分まで持って行けると  
思っていた」(昭和24年12月 GHQ歴史課の事情聴取)

#### 実情は、お寒いものだった

参謀本部は、米軍の上陸地点として第一に鹿  
児島県志布志湾を予想。湾入り口の内之浦に  
15口径カノン砲7門を据え付けることにして、昭  
和19年8月から地下砲台構築にかかっていた。

ところが砲台が完成しても、肝心の大砲がな  
かった。大口径の重砲を生産出来るのは、呉海  
軍工廠、陸軍の大阪造兵廠、民間では日本製鋼

7月サイパン陥落で総辞職。戦後ピスト  
ル自決を図り未遂。A級戦犯で刑死

#### 岸 信介(し・のぶすけ)

明治29(1896)～昭和62(1987)山口県生  
まれ。佐藤栄作(さとう)の兄。昭和11年、東  
条が関東軍参謀長時代に満州国実業部  
次長。15年商工次官。16年東条内閣商工  
相。18年11月軍需省新設で次官・国務相  
に回ったが、東条の辞職要求を拒否、東  
条内閣倒壊の一因に。27年衆院議員。31  
年自民党総裁選で石橋湛山に敗れ石橋  
内閣外相。32年石橋が病气辞任、首相に  
就任したが、35年の安保闘争で退陣に

#### 河辺 虎四郎(かべとらしろう)

明治23(1890)～昭和35(1960)富山県生  
まれ。陸軍中将。ソ連、ポーランド駐在。  
昭和12年参謀本部戦争指導課長。第2航  
空軍司令官、航空本部次長を経て20年4  
月参謀次長。敗戦直後、マニラに大本営  
代表として赴きマッカーサーの命令を  
受けた。戦後はGHQ歴史課嘱託に

#### 松平 康昌(まつだいらやすまさ)

明治26(1893)～昭和32(1957)福井県出  
身。侯爵。明大教授を経て昭和11年内大  
臣秘書官長。戦後24年に式部官長

#### …… 当時の陸軍部内の空気は ……

高山信武中佐(たかやまのぶたけ)は、「ソ  
連への近衛特使派遣による終戦工作  
は、陸軍大臣と参謀総長のほか、軍内  
には極秘裡に進められた。万一、この  
事が漏洩した場合、軍は挙って猛反  
対するであろうし、また大混乱が予  
想されたからだ。首相秘書官松谷誠  
大佐は総理の意図を承知してこの工  
作に参画し、近衛使節派遣の際は陸  
軍随員に予定されていたと云う。し  
かし松谷は、陸軍側に何ら連絡ない

所だけで、B29の空襲が始まると、大砲の生産をやめて高射砲生産にかかりっ切りになっていた。仕方なく、下関と対馬の要塞砲を持ってくることにした。

犬吠埼から70<sup>キロ</sup>近い九十九里海岸に30門、下田から鎌倉までの90<sup>キロ</sup>に22門の大砲を配備する計画だったというが、1<sup>キロ</sup>当たり1門にも、遠く及ばない。昭和19年6月に米軍がサイパン島に上陸して来た時、陸軍が「絶対撃破して見せる」と豪語した根拠は、1<sup>キロ</sup>5門の大砲を配備していたからだったが、米軍の方は桁違いで1<sup>キロ</sup>に50門並べるのが普通だった。

▽河辺(鐵峯)は「本土決戦により勝利に導き得るような期待は、到底なかった」(昭和23年8月 GHQの囁き)  
「渡洋遠征してくる敵に、彼らの予期せざる莫大な損害を与え、日本本土攻撃の困難と日本国民の強烈な抗戦意識を、自覚せしむることが出来たならば、あるいは比較的有利な態勢で終戦に導くチャンスを掴めるとの期待を持っていた」

▽東郷(外相)でさえ ポツダム会談前の 一撃を期待

●もう一つ、終戦工作を縛ったのは憲兵の弾圧

▽吉田茂(鐵首相)は 4月15日 逮捕された

— 木戸の話 (昭和25年4月 GHQの事情囁き) —

「和平論者の検挙が盛んに行なわれていた時期であった。私も目をつけられていた。それで戦争継続論者の立場を一時的にも強くするような刺激を与えると、彼らは和平論者の肅正をやったかも知れない。例えば私は内大臣を追い出されて、継戦論者が私に替わる。そして同様のことが政治指導層全面に行なわれたかも知れない。継戦論者は主として軍部であり、とにかく軍に向っては国民は手も足も出なかった。津々浦々には軍隊が配備され、憲兵の監視網も張られている。国民の間の組織といえは、軍の息のかかったもの以外には全くなくなっている。軍の意向に反した活動の余地などは、国民には全然残されていなかった」

し協議することはしなかった。たとえ連絡したとしても、当時の陸軍全般の空気から見て、一蹴せられ、あるいは裏切り者、卑怯者扱いされるのがおちだからだ」

高山 信武(たかやま・しのぶ)

明治39(1906)～昭和62(1987) 陸軍中佐。昭和16年参謀本部作戦課参謀、戦力班長。戦後は陸上自衛隊に入り陸将。統合幕僚会議事務局長、北部方面総監。著に「参謀本部作戦課の大東亜戦争」

松谷 誠(まつたに・せい)

明治36(1903)～平成10(1998) 福井県生まれ。陸軍大佐。参謀本部戦争指導班長の昭和19年7月、サイパン陥落で東条(参謀長)に早期終戦を訴え支那派遣軍参謀に左遷される。11月陸相秘書官に戻り、20年4月鈴木首相秘書官。戦後は陸上自衛隊に入り陸将、北部方面総監

東郷の手記「時代の一面」から

「かかる戦況の下では外交活動は思いもよらざるところだが、殊に三国会談が開始せられんとする矢先に、我が国力は既に尽きたとの印象を敵国並びに蘇聯に与えた場合には、その印象を基準として対日方策を定むることとなるべきは明瞭である。仮令三国会談後に至って相当な戦果を挙げる事があっても、外交的見地からすれば後の祭りでは効果がないわけであるから、三国会談前に少なくとも敵の機動部隊を捕捉して一打撃を与えることにして貰いたいと説き、陛下にも内奏し、陸海軍大臣にも要請した」

吉田 茂(よしだ・しげる)

明治11(1878)～昭和42(1967) 東京生ま

▽富塚清(勲工學)も 4月19日 牛込憲兵隊に拘留

…… ちょっとした文章もひっかかった ……  
尋問はもっぱら、雑誌で軍神加藤建夫隼戦闘機隊長の映画を、「国辱」と、けなしたことだった。昭和19年3月映画「加藤隼戦闘隊」が封切られると、灰田勝彦の「エンジンの音 轟々と 隼は征く 雲の果て」の歌が、大ヒットしていた。富塚も「これは、一本とられたかな」と思ったが、映画の批評であったことを思い出し、とうとうとまくしたてた。「よく文章を見てください。私は、その映画が国辱だといっておるんですよ。支那海でちょっと霧がかかると、五機中三機が海に落ちてしまうなんて情景が出ている。こんな航空技術は恥ずかしくて、世界に発表できません。これを見たら、アメリカあたりは、ほくそえむでしょう」 憲兵も「なるほど」と、富塚は3日後釈放された。

▽その富塚寄稿の原稿が 中日新聞に掲載された「ドイツ敗戦(5月7日)は何を教えるか？

洩れなく戦訓をくみとれ」

「敗因として、二ないし三面作戦がいけなかったといわれるが、戦力がそれに副えば何ともないはず。この因として、一、神がかり、二、排他、三、頭が固く機動性がない。ユダヤ教排撃など要らぬことという趣旨。なお科学軽視、教育軽視、思想戦の敗北、文化戦の敗北 … ということも付記しておく」(「ある科学者の戦中日記」)

▽そのまま 日本の敗因に 通ずるものだったが

間もなく 憲兵隊から 同盟通信(願の配元)にお達し「物量に屈したというのは不可。

ドイツ人の戦意喪失によって負けた、とせよ」

●日ソ交渉の間、佐藤尚武(勲工學)は終始一貫反対した

▽東郷(勳)から「日ソ友好強化」の訓令(6月1日)に

8日付至急電報で「ドイツ壊滅の今日、ソ連として何を苦しんで、米ソ関係を犠牲にしてまで、日ソ関係の増進を考えるであろうか」

左近司政三(勳)は東郷について

「外交は他の杞憂を許さず、干渉も許さず、自

れ。重臣牧野伸顕の娘婿。昭和11年広田内閣外相候補に推されたが陸軍に反対される。駐英大使となり14年退官。戦後東久邇、幣原内閣外相。21年鳩山一郎の公職追放で自由党総裁となり首相。5次の内閣を組織、講和条約、日米安全保障条約を締結。29年造船疑獄で総辞職。元老として大きな影響力を持った。国葬

富塚 清(とみづか・きよし)

明治26(1893)～昭和63(1988)千葉県生まれ。東大工学部教授。戦後、明大、法大教授。著に「ある科学者の戦中日記」

加藤 建夫(かとう・たてお)

明治36(1903)～昭和17(1942)北海道生まれ。陸軍中佐。一式戦闘機「隼」で編成された加藤隼戦闘隊を指揮し戦果を重ねたが、昭和17年5月22日ベンガル湾上空で戦死。軍神として少将に2階級特進

阿川弘之さん「戦後60年の思い」

「戦争に負けてよかったとは思われないけれど、負けた結果はよかったと思わざるを得ないことが多いと感じるようになりました。言論は自由ですし、とにかく憲兵の時代はひどかった…。 (平成17年11月 読新週刊)」

佐藤 尚武(さとう・なほたけ)

明治15(1882)～昭和46(1971)大阪生まれ。ベルギー、フランス大使を経て昭和12年林内閣外相。17年ソ連大使。戦後22年に参院議員。24年から4年間参院議長

左近司 政三(さこんじ・せいぞう)

明治16(1879)～昭和44(1969)大阪生まれ。海軍中將。海軍次官を経て佐世保鎮守府長官の昭和9年、条約派追放人事で予備役に編入。16年第3次近衛内閣商工相。20年4月鈴木内閣国務相

信たっぷり、頑として他の容喙をさせぬ。他の言うこともきかず」(昭和25年3月 GHQの事情談)

▽東郷は一旦「ソ連」と決めてかかると 頑固だった  
▽広田・マリク会談も 佐藤には 一切知らせず

佐藤が知ったのは 7月10日の電報

「日本側提案に対するソ連の回答を督促せよ」

▽佐藤が 翌日 モロトフ(外相)に会見すると

「伝書使便が着いていないので、

詳細は到着のうえ研究しよう」

佐藤は「せせら笑った調子で、

揶揄されて引き下がった」

▽13日 近衛特使派遣を 申し入れるため

面会を申し込んでも「ポツダム出発前で

忙しい」と ロソフスキー(外相)が応対

▽ソ連は 18日夜「近衛特使の使命が

具体的でない」と 近衛派遣を 拒否して来た

ポツダムでは その日

スターリンが 米英首脳に ぬけぬけと

「日本から和平斡旋の依頼があった」

▽もっとも アメリカは 佐藤への11通の電報

佐藤の返電13通と 外交暗号の解読で

そんなことは 百も承知していた

— 東郷は手記「時代の一面」に —

「日本に対し既に開戦の決意を為して大使との会見および近衛公の入国を肯んじなかったとまでは、想像し得なかったのは甚だ迂闊の次第であった」と反省している。

▽なぜ もっと早く ソ連の肚を見抜けなかったか

米国に 直接ぶつかるチャンスは なかったのか

結局は「無条件降伏は何としても避けたい」

有条件にするには ソ連を通ずるしかない

東郷だけではなく 首脳部全員に

この気持ちが あったことが

外交判断を曇らせ 外交の遅れを 加速させた

●もし、ルーズベルトが4月12日に死ななかつたら？

▽日本に対し常に「無条件降伏」を

要求し続けてきた ルーズベルトだったが…

モロトフ(V. M. Molotov)

1890～1986 スターリンの側近。昭和5年人民委員会議議長(首)となり14年からは外相。スターリン死後、32年に解任

「日ソ交渉」を評して

栗栖三郎「既に罹災した家屋を担保にして、銀行から金を借りようとするのと同様だ」 (報「泡沫の三十五年」)

幣原喜重郎「近衛は行かなくてよかった。もし行ったらすれば、それは実に笑いもの以外の何物でもなかったであろう。日本から何一つ、持って行く土産がない。ただ、陛下の御親書などというソ連にとって少しもありがたくない土産で、スターリンがこれに耳を傾けるとなどと思うのは、全くの見当違いであった」(報「外交五十年」)

栗栖 三郎(くす・さぶろう)

明治19(1886)～昭和29(1954)神奈川県生まれ。通商局長、ベルギー大使を経て昭和14年ドイツ大使となり日独伊三国同盟に調印。帰国後、日米交渉で野村大使補佐のため、特派大使として渡米。著に「泡沫の三十五年」「日米外交秘話」

幣原 喜重郎(しげはら・きじゅうろう)

明治5(1872)～昭和26(1951)大阪生まれ。大正4年外務次官。8年駐米大使を経て13年加藤内閣外相。若槻、浜口内閣でも外相を務め、昭和5年ロンドン軍縮条約に調印した。戦後20年10月首相。22年衆院議員、24年議長。著に「外交五十年」

— 広田・マリク交渉について —

佐藤は「日本側がすっかり泥を吐いて手の内を見透かされたくらいがオチであって、あの際、貴重な一か月を空費したことは承服出来ない」

▽その極東政策 対日政策が 変わったのでは？

そう思わせる人事が 昭和19年5月1日

国務省極東問題局長に グルー(元駐日大使)

前任局長ホーンベックは 対日強硬派

蒋介石支持派 局長4か月で オランダ大使に

▽11月27日には 対日強硬派 ハル(国務長官)が

病氣辞任 後任に ステティニアス(大蔵省特別顧問)

グルーも 国務次官に昇格した

▽グルーは 局長就任2週間後「滞日十年」を出版

「日本の天皇は平和を愛する性格の人だ。武断的な日本の軍部とは別に、天皇を中心とする穏健派が存在する」と 強調していた

▽極東問題局のブレーンも 大使時代の部下で

大使館参事官のドゥーマンが 特別補佐官

一等書記官のディックオーバーが 日本課長

商務官のウィリアムスが その課員に

大阪生まれ、大阪育ちのドゥーマン

父親が牧師をしていた大阪で生まれ、父親が東京のミッション・スクール教頭、奈良の校長と転勤したため、小学校は東京・九段の暁星学園、中学が郡山中学(姉)。13歳で帰国しアメリカの高校、大学を出て国務省に入った。日本課長の時、グルーに請われて大使館参事官に。

外務省関係者に言わせると、「スシが好きで、摘み方も堂に入っていて、日本語はペラペラ。それも関西弁のべらんめえ調だった」日本人の気質、ことにその皇室観、天皇観を肌で知っているアメリカ人だった。

▽週刊誌「タイム」は「東京のアメリカ大使館が 国務省極東問題局を占領した」と 書いた

▽対日戦の帰趨が 見え出した時

ルーズベルトが 中国派を一掃し

日本派を起用した意図は 何だったのか？

▽日本軍は どの戦線でも 絶望的な状況の中で 「最後の一兵まで」と 戦い続けている

それが「無条件降伏」の要求と 気付いて グルーを 表舞台に出すことで

「その旗」を さりげなく 下ろして

日本に 早期降伏を促す狙いが あったのでは…

ルーズベルト(Franklin D. Roosevelt)

1882～1945 米国第32代大統領。民主党選出。昭和8年大統領に就任するとニュー・ディール政策を推進し、大恐慌に対処。第2次大戦で連合国陣営を指導して勝利に導き、国連の基礎構築に当たる。米国史上初の4選を果たしたが急死

グルー(Joseph Clark Grew)

1880～1965 米国外交官。国務次官などを経て昭和7年駐日大使。開戦で17年に帰国するまで満州事変後の日米関係改善に尽力した。帰国後19年5月国務省極東問題局長、11月には国務次官に就任、国務長官代理に。著に「滞日十年」

— グルーの改善努力を阻んだ壁 —

日米交渉の切羽詰まった時期に、グルーほどその改善に努力した大使はいなかった。国務省に対しては勿論、ルーズベルトにもハーバード大学で一緒に大学新聞編集に当たった仲だったから、直接「日本に宥和政策を」と訴えていた。

その努力をことごとく阻んだのが、昭和3年から極東部長を務め、12年に国務長官顧問になっていたホーンベックだった。若い頃中国の大学で4年ほど教鞭をとったことがあり心情的にも中国寄り。開戦のきっかけとなった在米日本資産凍結や石油禁輸など、全面的経済封鎖の推進者だった。

ハル(Cordell Hull)

1871～1955 昭和8年～19年までルーズベルト大統領時代の国務長官。16年11月、中国からの日本軍撤退など、「ハル・ノート」を提示、日本側はこれを「最後通牒」と見なして太平洋戦争に突入。20年国連創設の功勞でノーベル平和賞

▽「実は、中国情勢を懸念してのことだった」と  
指摘する 歴史研究家 鳥居民(とりい・たみ)さん

— 鳥居さんの「昭和二十年」から —

「ルーズベルトが恐れたのは、日本との戦いが長引けば長引くほど、中国の共産党勢力が大きくなり、国民政府の支配する領域は共産勢力に蚕食され、日本との戦争が終わった後、蒋介石と毛沢東との国共内戦に発展する恐れのあることだった」

▽鳥居さんは ルーズベルトに ショックを  
与えたのは 支那派遣軍が 河南省で  
昭和19年4月18日に開始した「大陸打通作戦」

▽蒋介石軍が撃破され 軍事力を 低下させたのに  
共産軍の抗日拠点は 無傷だった

かえって 勢力を 増大させる結果になり

戦後の「国共内戦」に 微妙に 影を落とすことに

▽グルーが 極東問題局長になったのは

河南防衛軍が 壊滅した直後

國務次官昇格は 桂林 柳洲が 陥落した後

●昭和20年4月12日、ルーズベルトが急死した

▽ポッカリ空いた 真空状態の中に

前任者の死という「偶然による大統領」の

トルーマン(馱瀨)が 放り込まれた

▽ルーズベルトは トルーマンには

「ヤルタ密約」も 進行中の「原爆計画」も

何一つ 話していなかったという

副大統領になったのも偶然に近いもの

ミズーリ州ジャクソン郡の判事をしていて、昭和9年の中間選挙で民主党上院議員に当選。無名の地方政治家だったが、戦争が始まり、上院軍需調査委員会委員長になると、小まめに視察して不当利益をあげている軍需工場を摘発、名前を知られるようになった。19年秋の民主党大会でも、先輩のバーンズに頼まれ、副大統領に推薦する演説を考えている時、副大統領に指名されたのは、意外にも自分だった。

バーンズは、下院議員4年、上院議員10年を務めた後、ルーズベルトに力量を買われ、16年に

毛沢東(もう・たくとう)

1893～1976 中国の政治家。大正10年中国共産党創立に参加。昭和6年瑞金で中華ソビエト共和国臨時政府主席に就任し、9年長征を行ない根拠地を陝西省に移動。支那事変では、国共合作して抗日戦を指導。戦後は蒋介石政権を打倒、24年中華人民共和国を建設、国家主席に。34年党主席に専任したが41年文化大革命を起こして、再び全権を掌握した。死後、晩年の指導の誤りを指摘された

— 「大陸打通作戦」 —

「1号作戦」と名付けられ、動員兵力40万、馬7万頭、自動車1万2千台。中国大陸を南北に縦断すること1,500\*。支那派遣軍としては昭和13年秋の武漢作戦以来、5年半ぶりの大作戦。

目的は桂林、柳洲を基地とする空軍機に台湾が爆撃され、東・南支那海での船舶被害も急増したため、将来、日本本土爆撃の基地ともなり得る空軍基地を壊滅し、合わせて、仏印に至る中国大陸の交通路も確保しておこうというものだった。

…… 戦闘は一方向的だった ……

日本軍は連戦連勝。蒋介石軍は大量の遺棄死体と捕虜を残して退却していった。河南省を守るのは、日本の陸士を出て蒋介石が最も信頼していた湯温伯將軍指揮の20万だったが、「日本軍が進撃してくる」と聞いて、大半の兵士が逃亡、省内を荒らす匪賊に。5月9日に北京－漢口の連絡がつき、11月10日には桂林、柳洲を占領、仏印との連絡路も確保出来た。

作戦は一応成功に終わったが、作戦目的の達成前に作戦の価値そのものがなくなっていた。米軍は7月7日、サイパンを攻略すると中国大陸からで

連邦最高裁判事(兼職)に就任した。ところが、戦争が始まって大統領の要請で経済動員局長官、18年からは戦時動員局長官。「大統領代理」と呼ばれたほど、内政面の実力者だった。

ただ保守色が余りに強すぎ、労働組合との折り合いが悪く、ことに黒人層の反感があって、戦争中の副大統領にはマイナス要素が多過ぎた。つまりトルーマンの副大統領は、民主党内の革新政策派と保守派との妥協だった。

▽トルーマンは バーンズを 非公式な大統領顧問に  
6月に 国連が創設されれば

ステティニアス(國務)を 米国首席代表にし

バーンズを 國務長官にする予定だった

▽「偶然大統領」に加え バーンズが対日強硬派  
グルーのプランを 狂わせることになる

●日本でも、グルーの國務次官就任に注目していた

▽鈴木(閣)が ルーズベルトの死に

深甚な弔慰を 表明したのも 和平への

政治的配慮を秘めた 最初のサインであり

グルーの存在と 地位を 念頭に置いたもの

▽アメリカ側の反応は 5月8日

ザカリアス海軍大佐(戦時情報局で対日心理作戦を担当)の

日本向け放送となって 表われた

鈴木(閣)の弔慰に「サムライの心」を感じ

「今こそ、日本に対して心理戦を

開始すべき時期が熟したと思った」

▽しきりに 繰り返したのが「無条件降伏の意味」

「日本国民の絶滅や奴隷化を意味しない」

「無条件降伏とは、陸海軍が手を挙げること」

▽鈴木は 外務省から送られてくるプリントを見て

「向こうさんもいろいろサウンドしてきますね。

こちらの肚を何とか探りたいんだね」

そして「この放送の限りでは、

向こうさんも何とか戦争をやめたいようだ」

●施政方針演説(6月9日)も、アメリカに向けて

▽施政方針とは 何の関係もない

練習艦隊司令官(元7年)時代の 思い出話

はなく、太平洋から日本本土の爆撃態勢を整えていった。このため、そんな余力があったのなら、何をおいてもサイパンなど太平洋の防備強化を急ぐべきだった、と非難される。

— 14回にわたったザカリアス放送 —

情報将校のザカリアスは、大正11年のワシントン会議の前、さらに昭和2年から5年にかけて来日し、放送ではその時に会った鈴木や米内の名前をあげ、6年に高松宮夫妻が訪米した際「お供をしたのは自分だ」と伝えた。

外務省では、調布市国領にラジオ室を設置し、米国生まれの二世40人が、24時間態勢でサンフランシスコ放送をはじめ世界の放送に聞き耳を立てていたが、ザカリアス放送に「非常によく日本の事情を知っている奴だなあ」と、感じたという。

…… 迫水(内閣書記長)の判断は ……………

この放送の内容は、一つの終戦構想として十分参考になり得る。その意味では重要と思うが、果たしてどの程度に権威があるものか、単なる謀略放送に過ぎないのではないか。何しろ本土決戦に狂奔している軍を抱えた政府としては、この程度の情報にうっかり乗れないというのが内閣としての判断だった。

…… 外務省はどうだったのか ……………

渋沢信一(総長)は、「あの頃、一連のソ連交渉は、政府、統帥部のほんの一つまみの人しか、知らなかった。だから私たちとしては、当面の交戦国である米英の肚を探ることが大切で、いろいろ情報を集めていたが、その時ザカリアス放送が来たわけだ。しかし東郷さんは、外交のチャンネル



### 鈴木の施政方針演説(6月9日)

まず「世界に於て我が天皇陛下ほど、世界の平和と人類の福祉とを、冀求(ききゅう)遊ばさるゝ御方はないと信じて居るのであります」こう述べた後、練習艦隊航海の際、サンフランシスコの歓迎会での演説を披露した。「太平洋は名の如く平和の海にして、日米交易の為に天の与へたる恩恵なり。若し之を軍隊郵送の為に用ふるが如きことあらば、必ず両国共に天罰を受くべしと警告したのであります」

そして、アメリカが無条件降伏に固執するならば、「これに対して我々の執るべき道は唯一つ、あくまで戦ひ抜くことであります」

▽「天皇制保全という日本の国体護持こそが、  
平和の条件だ」と呼びかけているのだ

### ●アメリカに、直接呼びかけるチャンスは？

▽南原繁(勲一等) 高木八尺(勲二)は 6月1日

木戸(勲二)に「米國務省が日本派で占められている時をとらえて、直接対米交渉をすべきだ」

東郷は「米国のいずれかの方面と直接連絡をつけられれば、好都合だから、米国通の高木教授に考えがあれば、持参してほしい」

▽最後のチャンスは スイスで ダレス機関と

接触していた 藤村義朗(勲三)の6月15日付電報「大臣でも大将でも条約にサイン出来る人物をスイスに送れ。空路輸送は米国が責任を持つ」

▽終戦工作をしていた 高木(勲二)は 米内(勲三)に

「私を派遣してほしい。本土上陸だけでも食い止められる気がする」一生 ただ一度の

自薦を申し出たが 取り上げられなかった

▽高木は 残念がっている

「徹底抗戦派の、大西滝治郎軍令部次長あたりの猛烈な反対が主な原因だったか。それに米内自身も、アメリカの謀略的な申し入れではないかと疑っていた様子だった。終戦工作を推進していた井上成美次官が大将に進級して、次官が代わり、次官を介して米内を強く説得する方法がなかった」

をソ連一本にしぼっておられたし、また非常に手堅い方で、筋目を通される方だったから、妙なところから来た情報や和平工作は、謀略だ、といって取り上げられない」

### — アメリカは、どうとったのか —

平川祐弘さん(勲二)によると、鈴木苦心の一節「天罰」云々はアメリカの新聞でも削除された。10日付ニューヨーク・タイムズは「日本の鈴木首相は議会で演説し、連合軍の本土侵寇と無条件降伏の要求に直面した日本は「飽く迄戦ひ抜く」、fight to the lastと言明した」とだけ、報じた。平川さんは「この一節は米国当局の検閲により削除されたのであって、この事実こそ鈴木意図がアメリカ側に通じた証拠だ」演説全文を公表すると、米国内の平和主義者が「早く平和を」と騒ぎ出し、戦意高揚の妨げになると、伏せたのではないかと。

ザカリアスも「鈴木が演説で表向きは戦争について述べているが、内心では平和を考えていることは、その演説の冒頭から明らかであった」

そこで7月7日の放送で「日本は選択を遅らせてはならぬ。その時は迫っており、あなた方は急がねばならぬ。明日では遅すぎるかも知れない。鈴木首相！日本の運命は、あなたの手の中にある」と訴えたのです。

### 南原 繁(なんばら・しげる)

明治22(1889)～昭和49(1974)香川県生まれ。大正10年東大教授となり、政治学を講義。戦時中も軍部に迎合せず、自由主義的立場を守り20年3月法学部長。12月東大総長。占領下、学問の独立を主張し、「全面講和」を訴え吉田(勲三)から「曲学阿世の徒」と。44年日本学士院長

▽東郷も 米内も 陸軍が同意している

「ソ連仲介の終戦工作」の合意を 崩したくない  
この気持ちが 最後のチャンスを 潰すことに

▽東郷外交は とにかく一本道 窮屈過ぎた

#### 東郷と吉田茂の違い

日米開戦の時も、「ハル・ノート」について、吉田は「これは最後通牒なんかじゃないよ。これで交渉を続けるべきだ」東郷に交渉継続を勧めたが、すでに開戦決意を固めていた東郷は、聞かなかつた。信念の固さでは、二人は外務省でも双璧だったが、先見性となると、吉田の方がはるかに優れていたのでは…。

広田内閣が、日独防共協定(昭和11年11月25日調)に、在外大使の了解を得ようとした時、ただ一人、最後まで反対したのが吉田(騷燥)だった。陸軍省から駐在武官辰巳栄一(帷、のち帷)に「吉田を説得せよ」の訓令が来たが、吉田は「日本の軍部は、ナチス・ドイツの力を買い被り過ぎている。共産主義を防ぐイデオロギーのためと言うが、ドイツとの協定は、必ずや政治的、軍事的なものに進展して、しかも、現状打破を叫ぶ枢軸側が戦争を起こした場合、日本は英米と戦う羽目になるだろう。この際、何も日本は飛び込んで枢軸側につく必要がないじゃないか。どちらかにつくなら、自分はむしろ英米を選ぶ。なぜなら、それが日本の将来の為になるからだ」

辰巳は「理路整然、結局ミイラとりがミイラになって、中央に「微力説得するを得ず」と電報した」が、「すでに第二次大戦、ひいては日本の参戦を予見した吉田さんの鋭い勘には、全く敬服のほかはない」と言っている。

●ルーズベルトの死は、グルーにもショックだった

▽グルーは 主張していた「天皇制の存続を明確な形で保証すれば、日本は国内の軍部強硬派を押さえ、日本を早期降伏に導くことが出来る」

そのグルーを 國務次官にしたことは  
ルーズベルトも 政策推進を 認めていたことに

高木 八尺(たかぎ・やしか)

明治22(1889)～昭和59(1984)東京生まれ。大蔵省を経て大正13年東大教授。米国政治外交史研究の第一人者で昭和42年文化功労者。著に「米国政治史序説」

藤村 義朗(ふじむら・よしろう)

明治40(1907)～平成4(1992)大阪生まれ。海軍中佐。昭和15年ドイツ駐在武官補佐官。20年3月スイス駐在武官となり終戦工作に当たる。戦後、貿易会社経営

大西 滝治郎(おほし・たきじろう)

明治24(1891)～昭和20(1945)兵庫県生まれ。海軍中将。昭和18年軍需省航空兵器総局総務局長。19年10月第1航空艦隊長官に就任、レイテ決戦に「神風特別攻撃隊」を編成し、特攻作戦を採用。20年5月軍令部次長。敗戦翌日に自決した

井上 成美(いのうえ・なるみ)

明治22(1889)～昭和59(1975)宮城県生まれ。海軍大将。軍務局長、航空本部長、第4艦隊長官、海兵校長を歴任。19年8月海軍次官に就任、終戦工作を推進した。20年5月大将に進級、航空本部長に転出

…… 辰巳が「印象に残っているのは」……

昭和12年8月26日、自動車で南京から上海に向かっていたイギリスのヒューゲッセン大使が、日本海軍機の誤射で負傷した事件。海軍武官と一緒に英海軍省に頭を下げに行くことになったが、吉田はこう注意した。

「アポロジャイズ(apologize 認る)という言葉は使うな。リグレット(regret 懺)と言え」一度、謝ってしまうと、それで全てが決まってしまう、その後の交渉にならない。辰巳は「さすが外交官の長老」と感心している。

▽グルーは ソ連を 対日戦に 参加させないため  
また その時間的余裕を 与えないためには  
一日も早く 日本を降伏させることだ  
そして 軍部の反乱など 混乱ない終戦には  
天皇の名による 詔勅発布以外にない

▽そう考えて 5月28日 トルーマンを訪ね 説得した  
「無条件降伏要求の方針を修正して、現在の皇室  
を容認する条件を日本政府に示し、日本を早期  
降伏に導くべきだ」ドゥーマンに作成させた  
声明の草案(ポツダム宣言の欺なる)を 示して  
「声明の発表はなるべく早い方がよく、国務省と  
しては5月31日に発表を予定している」

▽トルーマンから「軍事当局と相談してほしい」  
翌日29日 その会議が 開かれたが  
反対は 戦時動員局長官だけ  
スティムソン(陸軍長官)は 原則的賛成だったが  
発表時期については  
「ある軍事的理由」で 時期尚早とされた

●グルーは、沖縄戦のメドがついた6月18日早朝、再び  
トルーマンに進言した

▽「例の声明を、沖縄陥落を公表する時、  
一緒に出したらどうか」と  
午後から 日本本土進攻作戦について  
軍首脳会議が 開かれることになっており  
その前に 政治的解決の同意を 取り付けようと

▽トルーマンは「近く行なわれる  
ポツダム会談まで、発表を保留することにした」  
アメリカ世論は まだまだ 真珠湾の恨み  
「リメンバー・パール・ハーバー」に 燃え盛り  
「天皇を処罰せよ、死刑にせよ」が 圧倒的  
「偶然大統領」の トルーマンには  
世論の風に逆らい 天皇制を保証することは  
とても 考えられなかったのだろう

●九州上陸作戦は、6月18日午後承認された

▽軍首脳会議の出席者は リーヒ(大統領軍事顧問)  
マーシャル(参謀総長) キング(海軍作戦部長)  
スティムソン(陸軍長官) フォレストル(海軍長官)  
陸軍航空隊総司令官(代理)に マックロイ(陸軍次官補)

#### — グルーもソ連の脅威を… —

「ひとたびソ連が対日戦争に参加すれば、モンゴル、満州、朝鮮は、やがてその支配下に呑み込まれ、中国も遠からずその支配圏に呑み込まれ、最終的には日本も呑み込まれることになる」  
(5月19日「外交認識」)

スティムソン(Henry L. Stimson)

1867～1950 昭和4年から4年、米国务務長官を務め、満州事変に反対する「スティムソン・ドクトリン」を唱えた。戦争中、陸軍長官として太平洋戦争と原爆製造のマンハッタン計画の指揮に当たった

#### — 原爆が開発されていた —

グルーは、「軍事的理由の時期尚早」を「現在行なわれている沖縄戦」との関連、「激戦の最中にこうした声明を出すことは、アメリカ側の弱みと誤解される恐れがあるからだ」そうだったが、スティムソン委員会(参謀総長スティムソン)は6月1日、全会一致で「日本への原爆投下」を大統領に勧告していた。

マックロイ 1895～1989

弁護士出身。戦争中、スティムソンに請われて陸軍次官補。戦後、昭和22年に世界銀行総裁。24年ドイツ占領管理担当・米高等弁務官となりケネディ政権では軍縮問題担当顧問に就任した

#### — 米陸軍省は「天皇制存続論」 —

次官補のマックロイが、軍首脳会議に出席したのはスティムソンが体調不良で、代理出席を依頼されたから。前夜、スティムソンと会議の方針について打ち合わせたが、マックロイは日本の戦後処理を協議する委員会でグルー、ドゥーマンと話し合っ、その考えに共鳴していたから、「これ

▽マーシャルは 統合幕僚会議を代表して  
九州上陸作戦(11月1日)の必要を 強調した  
「空爆だけで日本を敗北させることは不十分で、  
最後の勝利は陸軍部隊によって得られる」

これに対してスティムソンは「日本国内には  
現在の戦争を支持しない和平勢力があり、軍事  
力で中央突破を図る前に、その影響力を強める  
ような方法を講ずる必要があるのではないか」

リーヒも「私は無条件降伏は不必要と思う」

▽しかし トルーマンは「国民世論の大勢が求め続  
ける日本への無条件降伏の要求を、自分が音頭  
をとって変えさせる積もりはない」

▽マーシャルは ソ連参戦への期待感を 3回も強調  
トルーマンも 本土上陸作戦による米軍損害は  
それによって 大幅に減らせると 考えていた

▽ここで マックロイが 爆弾発言をした

「原爆の使用を警告したらどうか」

この議論も 基本的な事実で 行き詰まった  
原爆実験が 果たして 成功するのかどうか

それが明確にならなければ 無意味となった

▽九州作戦(11月1日)は 6月29日 正式に承認され  
暗号名「オリンピック作戦」

九十九里浜 相模湾上陸(21年3月1日)の

「コロネット作戦」も 決まった

●ポツダム宣言が発表された時(7月26日)、日本側で一番  
問題になったのは第12項だった

#### ポツダム宣言第12項

十二、前記諸目的カ達成セラレ且日本国国民ノ  
自由ニ表明セル意思ニ従ヒ平和的傾向ヲ有シ且  
責任アル政府カ樹立セラルルニ於テハ聯合國ノ  
占領軍ハ直ニ日本国ヨリ撤収セラルヘシ

▽この 抽象的な表現が 果たして

天皇制の存続を 保証するものなのか どうか

政府部内の 意見の対立と 混乱を招き

受諾決定の遅れから 原爆投下 ソ連参戦に

▽実は グルー起草の原案は 第12項の後に

降伏後の「立憲君主制の下での

天皇制保全」が 明記されていた

以上の流血なしに日本を降伏させる  
ことが出来るはずだ。立憲君主制と  
してなら、天皇制存続にアメリカは  
同意出来るのではないか」こう主張  
し、スティムソンも同意していたが、  
会議に出てみるとスティムソンも出  
席していた。

#### リーヒ発言

「日本を無条件降伏させるのでなけ  
れば、我々が戦争に勝ったことにな  
らないなどと云う人もあるが、私は  
そのような意見には同調しない。私  
が恐れているのは、無条件降伏に固  
執していると、いよいよ日本を絶望  
的にさせ、米軍の死傷者の数を増加  
させることだ」

#### マックロイ発言

「大統領が日本の天皇に対し強い調  
子の文書を送られるのが望ましい。  
日本に完全な降伏を求めること、し  
かし、立憲君主制を基礎とする天皇  
制を認めること、そしてアメリカが  
革命的な規模を持ち、一つの都市を  
一発で破壊できる兵器を所有してい  
ることを明らかにし、それでも日本  
が降伏を受諾しないなら、アメリカ  
はこれを使用せざるを得ないことを  
日本に通告すべきだ」

#### グルー原案

第12項の後に、こう続けていた。「降  
伏後成立する政府が、将来、日本に於  
ける侵略的軍国主義の発展を不可能  
ならしむるような平和政策を、平和  
愛好の諸国に確信させるならば、現  
在の皇室の下での立憲君主制を含み  
得るものとす」

▽スティムソン(驍騎)も グルー案を支持し  
7月2日 トルーマンに 覚書を提出した  
「日本に天皇制を認めて降伏勧告をすべきだ」

●「天皇制保全」は、なぜ削除されたのか？

▽国連成立(6月26日) 米国首席代表にステティニアス  
新国務長官は 7月3日 バーンズが承認された  
▽トルーマン一行は 7日 ポツダムへ向かったが  
バーンズは ハル(驍騎)に 意見を求めた  
▽17日 ポツダムのバーンズから 届いた返電は  
「私は宣言文の発表を遅らせることに同意する。  
もし発表されるなら、あなたが言うように「言  
明」を含めない」「言明を含めない」とは  
12項の「天皇制容認」の部分を 削除すること  
▽トルーマンは 対日降伏勧告の 共同宣言に  
同意したが 天皇制には触れないことを 指示

●7月17日からポツダム会談が始まった

…… 木戸(内大臣)はGHQの聴取に(昭和25年4月) ……  
〈仮に5月頃、天皇制存続の宣言をアメリカが  
出したら、どうだったか〉の質問に  
「果たしてそれが終戦を促進することになっ  
たか、また逆に、妨害することになったかは、  
一概に断定出来ない。主戦論が、大いに勢いを  
得る心配がある。必ずや「アメリカは硫黄島で  
多大の出血を余儀なくされた。今また、沖縄で  
も甚大な犠牲を出している。この分では、本土  
決戦など敢行しては、大変なことになると、考  
えるに至ったに違いない。とにかく、アメリカ  
にも弱点はあるのだ。苦しいのは、日本ばかり  
ではない。勝敗は最後の五分間で決するのだ」  
というような主張を展開するに違いない。下  
手をすれば、かえって、折角芽を吹きかけた和  
平論を双葉にしてむしり取らせる結果を招い  
ていたかも知れない」

▽迫水(内閣書記官長)も「ポツダム宣言がもし一か月早く  
出ていたら、完全に拒否していたろう。それほど  
終戦の時期というものは、阿吽の呼吸が、内外と  
もピッタリ合わねばダメなものなんだ」

ハルは「天皇制容認」に反対

宣言案第12項の後半部分に、バーンズから電話で意見を求められたハルは、「回顧録」よるとこう答えている。「その宣言案は、余りに日本に対して寛容過ぎるように思われた。特に、今まで我々は断固たる態度で、無条件降伏を強調していた、と私は答えた。そんな宣言は、天皇制の存続を保障するだけでなく、天皇の下における支配階級の封建的な特権までを保障することになる、と私は指摘した。私は、天皇とその支配階級から、その法外なまでの全ての特権を剥脱しなければならぬ、と云った」

ハルは、電話だけでは心許ないと思ったのか、グルーを通じて16日、ポツダムのバーンズに電報を打った。「天皇と天皇制を存続させるという提唱者たちは、この方法が戦争を短縮させ、連合軍人の生命を救うものだ、と信じている。万一、この方法が成功するなら、確かに大きな効果があるだろう。しかし、この実際の効果については、誰も知っている者はいない。日本の軍国主義者たちは、この宣言を妨害することに一生懸命になるだろう。逆に、日本は勇気づけられることも考えられるし、また、そんなことをすれば、恐るべき政治的反発が合衆国内で起こるだろう。だから、その宣言を出すのは、連合軍の爆撃が最高潮に達し、ロシア参戦まで待つのがよいのではないだろうか」

昭和天皇も佐藤大使に

昭和21年5月に帰国した際「広田・マ  
リク会談で一か月を空費したことにつ  
いては、お前の言う通りだ。しかし  
あの時代には、どうしてもそれを  
経なければ、次の手がとれなかったのだ」

●グルーは8月15日、日本の終戦と歩調を合わせたように辞職した

▽バーンズが交代を望んでいることを

知っていたから バーンズ就任の日から

辞表は トルーマンに 預けていた

▽バーンズから「マッカーサーの顧問として日本へ行ったらどうか」と勧められたが 断った

娘さんへの手紙に こう 書いている

「マッカーサーは、多くのアドバイスを必要と

しないだろうし、私は支配者として、あの日

本の親しい、昔の友達と顔を合わせるのが、

全くいやだったからだ」

▽グルーには 昭和35年9月

勲1等旭日大綬章が 贈られた

日米修交100年を記念して 渡米された

皇太子ご夫妻(馱皇)が 持参された

ドゥーマンにも 勲2等旭日重光章

#### グルーの苦勞、天皇の耳に

太田三郎(終戦当時外務省調査第3課長)は、昭和25年に運輸審議会委員として訪米した際、旧知のドゥーマンから「是非話しておきたいことがある」と呼ばれ、ドゥーマンの家に一晩泊まった。

まだ国務省や世間全体が、日本に対し、特に天皇制について、誤った認識を持っていて廃止論を唱える者が多かった中で、グルー、ドゥーマンがいかに苦勞して戦ったか — ポツダム宣言の最初の草案を書いた経緯を詳しく聞いた。

帰国して、松平康昌(武蔵館)に話したところ、「その話を是非陛下にしてくれないか。実は陛下も、天皇制をどうするかという問題については、多分、グルーが努力して残すようにはからってくれたんだろう、とは思っていらっしゃるが、そんなにやってくれたということは、ご存じない。きっと陛下はお喜びになるだろう」

太田が参内すると、昭和天皇は「グルーは健康でいるか」と聞かれ、太田の話に何度も首を大きく振ってうなずかれたという。

